

彙 報

1996年（平成8年）1月～1996年（平成8年）12月

研究状況

I 班 研究

日 本 部

近代東アジア世界の構造連関 班長 山室 信一

近代東アジア世界とは、いかなる意味において他の地域と異なった位相をもち、その中で日本はどういう機能をもってきたのか、16世紀以降、現代に至る長いタイム・スパンを取ってヒト・モノ・思想・文学そしてそれらについての観念などの相互交渉の実態を明らかにしながら検討を重ねてきたが、第47回研究会をもって終了した。その成果は報告書として公刊を予定している。

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 落合弘樹 籠谷直人 齋藤希史 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安富 歩 山本有造 ロナルド・トビ（所内）塚本 明（三重大）

1996年

- 1月29日 第一次大戦期における対外政策の構造変化について 古屋哲夫
- 2月5日 「日本植民帝国」と東アジア 山本有造
- 2月19日 日本綿業の発展に果たした「アジア域内貿易」商の役割 籠谷直人
- 3月4日 明治初年の外征論 落合弘樹
- 2月18日 幕末の尊攘論と尊攘派 佐々木元

日・中・朝間の相互認識と誤解の表象

J.フォーゲル
班長 山室 信一

日本・中国・朝鮮の三国間には隣接した政治社会として相互の位置づけをめぐって認識上のギャップ

が存在し、それが時に政治的対立そのものの要因とさえなってきた。もちろん、その背景には様々な事情があり、これを解消することは容易ではない。そうした認識ギャップや誤解が、いかに歴史的に形成され、いかに反復・伝承されてきたか、を洗い出し、その克服の方途を探ることは今日いっそう必要となってきた。本研究では自民族中心主義そのものを前提としつつ、新たな民族間の相互認識をいかにして創出しようという問題意識に立って試行的議論を重ねている。

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 岩井茂樹 落合弘樹 籠谷直人 齋藤希史 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安田敏明 安富 歩 山本有造（以上所内）河田梯一 陶 徳民（以上関西大）季 衛東（神戸大）西村成雄（大阪外大）呉 宏明（精華大）文 京洙（立命館大）藤永 壮（大阪産大）服部龍二（神戸大・院）

1996年

- 5月20日 認識と誤解をめぐる課題と方法について 山室信一
- 6月24日 日朝相互認識をどうみるか？ — 共同研究班の方向づけをめぐって — ロナルド・トビ
- 9月30日 近代における日本人の中国旅行記 ジョシュア・A・フォーゲル
- 10月14日 明治前期日本の華僑観 籠谷直人
- 10月28日 シンポジウム検討会 — シンポジウムと班員のテーの設定 —
- 11月11日 親日派・対日協力者の論理と日本認識 水野直樹
- 11月25日 漢学者と明治文化の輸出 — 西村天囚の清国新教育推進論の特質 — 陶 徳民

12月9日 極東の過剰防衛の循環における言説
 の作用
 —「ノー」の語り手と聞き手の関係
 を中心に— 季 衛東

総力戦下の台湾業務動員網 近藤
 1940年代初頭の対アジア通商網

籠谷

9月25日 報告論文集についての最終打合せ

全員

「大東亜共栄圏」の経済構造 班長 山本 有造

先の山本班「『満州国』の研究」の終了をうけ、
 対象を「大東亜共栄圏」に広げようとするものであ
 るが、当面は経済構造に分析対象をしぼり、intensive
 な共同研究を行いたい。「大東亜共栄圏」研究は、
 経済史にかぎらず広く日本現代史においていまなお
 未開拓の分野であり、本研究班の発展の上に、政治・
 社会・文化の分析を含むやや大きな共同研究班「大
 東亜共栄圏」の研究」を予定している。現在、院生・
 準班員を含め約15名のメンバーで隔週水曜日に研究
 会を開いている。

なお本年度は最終年度にあたり、報告論文集の作
 成を準備中である。

班員 籠谷直人 水野直樹 安富 歩（以上所内）
 木村光彦（神戸大）近藤正己（近畿大）、副島昭一
 （和歌山大）平井廣一（北星学園大）松田利彦（神
 戸商大）松本俊郎（岡山大）山田 敦（学振特別研
 究員）盛田良治（大阪大・院）

1996年

1月10日 訪台報告 松本
 「満州国」の農業関連金融 安富
 1月24日 『新編・中華人民共和国地方誌業書』
 について 松本
 戦後台湾の産業政策と企業経営 許 雪姫
 4月24日 報告論文集についての打合せ 全員
 5月22日 書評・近藤正己『総力戦と台湾』
 山本
 「内外地行政一元化」問題について 水野
 6月5日 書評・西村成雄『張学良』 山本
 1940年代台湾工業論 山田
 6月26日 戦時期フィリピンにおける日本軍政
 の調査活動 盛田
 満州鉄鋼業の戦後復興 松本
 7月10日 帝国の断絶と連続 木村

異言語接触の場としての十九世紀日本

班長 齋藤 希史

本研究は、十九世紀の日本という時空間をさまざま
 な言語が接触・混淆した場としてとらえ、そこで
 何が生まれ、また消えていったのかを考えるもので
 ある。本年度は、先次の飛鳥井班よりの懸案であっ
 た《注釈漂流記事》の出版も果たし、また、従来はっ
 きりとは確認されてこなかった二葉亭四迷訳《あひび
 き》のロシア語底本（そしておそらくは二葉亭手沢の
 もの）を確定するなど、斯界にいささかなりとも貢献
 することができた。各班員の報告も、共通の問題意識
 のもとにより深化したものとなっていよう。なお、本
 研究班は1997年3月をもって終了するが、報告書は
 一年後の98年3月公刊をめどとし、原稿検討のため
 の会合も、97年度中に何回か行なう予定である。

1996年

1月31日 逸話の時代 青木
 2月9・10日 注釈漂流記事原稿検討 齋藤ほ
 か
 3月6日 二葉亭四迷《あひびき》から 木村
 4月24日 幕末明治のインソップ物語 谷川
 5月15日 幕末明治のインソップ物語（Ⅱ）
 —《訓蒙話草》から— 齋藤
 6月5日 漂流記事のトポス 齋藤
 6月26日 〈婦女童蒙〉から〈国民〉へ 平田
 7月10日 境界としての〈家庭小説〉 飯田
 7月17日 〈衛生〉のまなざし
 成田龍一（ゲスト）
 9月18日 二葉亭訳《あひびき》の底本の確定
 と翻訳分析 木村
 10月9日 〈五族協和〉の中の〈言語〉—〈満
 州国〉言語政策— 安田敏朗
 10月30日 西洋人による漢字金属活字の開発と
 その伝播 鈴木
 11月20日 鷗外漁史とはだれぞ— 雅号から筆

彙 報

名へ 金
 12月4日 一葉《十三夜》をめぐる 太田路枝
 12月18日 渡部温訳《陸軍史官必携》の翻訳作 法 ほか 谷川・齋藤
 班員 飛鳥井雅道 宇佐美 齊 大浦康介
 金 文京 藤田隆則(以上所内) 木村 崇 松田清
 (以上総合人間学部) 平田由美 米井力也(以上大
 阪外大) 青木稔弥 沈 国威(以上神戸松蔭女子学
 院大学) 谷川恵一(高知大) 内田慶市(関西大学)
 飯田祐子(神戸女学院大学) 鈴木広光(九州大学)

転換期における個人と組織 班長 佐々木 克

この研究班は、主として明治維新时期を生き、有名、無名の群像のライフスタイルを明らかにすることを課題としてきた。そのなかでとくに注意してきたことは、個人の伝記的研究をめざすのではなく、転換期における、社会ならびに組織と個人とのかかわり、という問題に比重を置いて、個人を見めてきたことである。個人の生活史を集合し、検討を加えることによって、その時代の社会のイメージとその断面を、浮き彫りにすることが出来ると思っている。研究会は96年3月で終了し、現在報告書作成のための原稿を、班員各自が執筆中である。

班員 飛鳥井雅道 落合弘樹(以上所内) 藤井讓治(文学部) 青山忠正(仏教大) 池田宏(滋賀県立図書館) 奥村 弘(神戸大) 鈴木祥二(名古屋大) 小股憲明(大阪女子大) 勝部真人(広島大) 鈴木栄樹(京都薬大) 谷山正道(天理大) 辻ミチ子(京都文化短大) 塚本 明(三重大) 原田敬一(仏教大) 母利美和(彦根城博物館) 藪田 貫(関西大) 手島一雄 岸本 覚(以上立命館大・院) 三沢 純(広島大・院) 沈箕戴(京大・院)

明治維新时期の社会と情報 班長 佐々木 克

明治維新时期は、おおまかに幕末の旧体制崩壊期と、明治の新国家建設期とに二分できる。しかし何れにしろ、変革期であり動乱期である。権力は動揺し、社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説などさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信して

ゆく。幕府や藩当局は、それぞれ独自の、情報蒐集システムを持っていた。しかし伝統のシステムだけでは、新たな状況に対応出来なくなる。また幕府は政治や外交に関しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、独自のネットワークをもって、情報の蒐集・発信主体として登場し、権力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的には、明治期に引き継がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えなければならない情報を、如何に早くかつ広く伝達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自体も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような実態をふまえて、明治維新という変換期における〈情報〉にかかわる諸問題を、総合的に検討してみようと思図しているものである。

班員 飛鳥井雅道 落合弘樹(以上所内) 青山忠正(仏教大) 奥村 弘(神戸大) 小股憲明(大阪女子大) 勝部真人(広島大) 齊藤祐司(彦根城博物館) 鈴木祥二(名古屋大) 鈴木栄樹(京都薬大) 谷山正道(天理大) 塚本 明(三重大) 原田敬一(仏教大) 母利美和(彦根城博物館) 山崎有恒(立命館大) 岸本 覚(立命館大・院) 三沢 純(広島大・院)

1996年
 4月26日 文久3年8月18日政変と薩摩藩 佐々木
 5月31日 密偵荘村省三と平安士族 落合
 6月28日 19世紀地域社会と「古代」情報 鈴木
 7月19日 明治14年政変直前期における政府と新聞 鈴木
 9月27日 近世後期における薩長「藩祖」調査 岸本
 10月11日 王政復古と薩摩藩 佐々木
 11月15日 新政反対一揆と情報 谷山
 12月6日 幕末期彦根藩の動向と宇津木六之丞 母利

西 洋 部

象徴主義の研究

班長 宇佐美 齋

4年間の予定で1993年4月より発足したこの研究班の目標と活動内容の概略は、以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文学テクストを主な対象として、象徴主義が提起した問題とは何かを問うことから始めた。その際、音楽・美術・演劇などの諸芸術との関わり、政治や社会の変動が及ぼした影響、思想的なコンテクスト、および中国・日本など非ヨーロッパ諸国との比較対象の視点をも重視し、より広い視点からも考察するようにつとめ、ついで、それらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを考えてきた。したがって、時代区分としては当初の計画通り、19世紀中葉から1920年代までを視野に入れて研究を行った。また同時に、分析哲学、精神分析学、社会人類学など人文諸科学における象徴理論についても合わせて考究してきた。研究会は原則として隔週で開催され、口頭発表と討議がなされた。現在、1997年春をめどに成果報告書の準備が着々となされ、そのため10月からは原稿検討会が行われている。

班員 大浦康介 齋藤希史 阪上 孝 森本淳生
(以上所内) 田口紀子 吉田 城 (以上文学部) 多賀 茂 松島 征 (以上総合人間学部) 柏木隆雄
上倉庸敬 内藤 高 (以上大阪大) 吉田典子 (神戸大) 山路龍天 (同志社大) 柏木加代子 (京都市芸大)
小西嘉幸 (大阪市大) 小林 満 (京都産大) 島本 澣 (帝塚山学院大) 丹治恆次郎 (関西学院大) ピエール・ドゥヴォー (甲南女子大) 原田邦夫 (愛知県大)
小山俊輔 三野博司 (以上奈良女子大) 鈴木啓司 (名古屋学院大)

1996年

- 1月22日 象徴主義の生理学 — ヴァレリー、ルーセル、シュールレアリスム — 多賀
- 2月5日 美学成立期における象徴概念 小田部
- 2月19日 詩の言語と晦渋さ — 象徴主義の表現と受容をめぐる — 宇佐美
- 3月4日 18世紀における記号と表現 小西

3月18日 研究成果報告書のとりまとめ今後の研究会の運営について

4月15日 ジュール・ルナールと象徴主義 柏木 (隆)

5月13日 フローベールと象徴主義 柏木 (加)

5月27日 Carl Nielsen comme symbole national Mette Hjort

6月10日 ゴラと象徴主義 — 『夢』を中心にして — 吉田 (典)

6月24日 Symbolisme / Picturalité — / Modernisme — 19世紀後半の絵画表現と「絵画」をめぐる — 島本

7月8日 ジョヴァンニ・パスコリ (1856 — 1912) における象徴主義 小林

9月21日 Musique et Symbolisme ドゥヴォー

10月7日 原稿検討会 (1) 吉田 (城), 丹治の原稿 上倉, 多賀

10月21日 原稿検討会 (2) 三野, 宇佐美の原稿 丹治, 松島

11月11日 原稿検討会 (3) 柏木 (加), 田口の原稿 宇佐美, 小西

11月25日 原稿検討会 (4) 小山, 内藤の原稿 原田, 森本

12月9日 原稿検討会 (5) 上倉, 吉田 (典) の原稿 小山, 宇佐美

12月21日 原稿検討会 (6) 鈴木, 柏木 (隆), 山路の原稿

森本, 小西, 吉田 (城)

コミュニケーションの自然誌 (二)

班長 谷 泰

1997年3月の研究班終了とともに、論文集を出版することをめざして、本年の前半は、各分担者の執筆内容を中心にした報告を、昨年ひきつづき行なった。その後、執筆が済んだ班員の原稿を順次検討し、論文集としての統一をはかるため、互いの論文を相互引用したり、使用する専門用語を統一したり、索引をつくったりする作業を続けた。次年は3月まで、

文献表や索引などの最終チェックに時間をを使う予定である。

班員 田中雅一、串田秀也、藤田隆則(以上所内)、菅原和孝(総合人間学部)、水谷雅彦(文学部)、北村光二(弘前大)、木村大治(福井大)、高畑由起夫(関西学院大)、野村直樹(名古屋市立大)、澤田昌人(山口大)、野村雅一(国立民族学博物館)、早木仁成(神戸学院大)、細馬宏通(滋賀県立大)、定延利之、山森良枝(神戸大)、宮脇幸生(大阪府立大)

1996年

1月29日	情報・規則・レリバンス	木村
3月11日	コミュニケーションの境界	細馬
4月8日	総説	谷
4月22日	原稿検討会	全員
5月13日	原稿検討会	全員
5月27日	社会的エージェントとコミュニケーション	片桐(ゲスト)
6月10日	原稿検討会	全員
6月24日	原稿検討会	全員
7月15日	原稿検討会	全員
7月22日	原稿検討会	全員
9月9日	原稿検討会	全員
9月30日	原稿検討会	全員
10月14日	原稿検討会	全員
10月28日	原稿検討会	全員
11月18日	原稿検討会	全員
12月9日	原稿検討会	全員

主体・自己・情報構築の文化的特質

班長 田中 雅一

本研究班では、1) 近年注目されつつある主体(subject)や自己(self)、行為者(actor)、パーソン、エージェント、個人(individual)、アイデンティティ、情動などの概念に着目し、そうした概念の学説史上の背景と意味を探り、2) これら諸概念の民族誌記述(とくに自省的・実験的民族誌と呼ばれるもの)における有効性などを批判的に検討するとともに、3) 通文化的観点から参加者の専門とする地域の主体や自己などの概念の特徴を考察することを旨とする。三年度ということもあり、さまざまな報告がなされた。

班員 谷 泰、藤田隆則(以上所内)、福浦厚子(滋賀大)松田素二(文学部)、菅原和孝(総合人間学部)、栗本英世、田辺繁治 林勲男(以上民博)青木恵理子(鈴鹿国際大)小田 亮(成城大)春日直樹(大阪大)川村邦光(天理大)窪田幸子(大手前女子大)棚瀬慈朗(滋賀県立大)富山一郎(神戸市外大)中谷哲也(奈良商科大)西井涼子(東京外大)渡辺公三(立命館大)李 仁子 金谷美和 川村清志(人・環・院)中谷純江(金沢大・院)鈴木健太郎(東大・院)

1996年

2月5日	霊媒師と霊童—パプアニューギニア、ベダムニ族の事例から	林
2月19日	風の音を聴け—セントラル、カラハリ、ブッシュマンの性と生	今村
3月4日	ヨハンゴ社会の変容と女性	窪田
3月18日	Burdensome Gift: Religious Exchange and the Position of Nuns	川並
5月20日	戦場の叙述—フランツ・ファノンをめぐる	富山
6月3日	主体 subjectivity のパラドクス	青木
6月17日	「人類学の危機」とリアリズムの主体の可能性	松田
7月1日	<主体>はいかに問われたのか? — 19世紀人類学の再検討	渡辺
10月7日	「発端の闇」としての植民地—カーゴ・カルトの再検討	春日
11月11日	サティという主体—北インド寡婦殉死について	田中
11月25日	移住者の文化とアイデンティティの重層性—在日韓国・朝鮮人の墓をめぐる	李
12月2日	異議申し立てとしての非婚—バリ女性の結婚と仕事	中谷
12月16日	人格の系譜学—マルセル・モースの「人間精神の一カテゴリー」を読む	出口

コミュニケーションの社会史	班長 前川 和也	6月4日	中間総括	全員
この研究班は、工業化が本格的に進行する以前のヨーロッパ、東アジア、西アジアでの社会的コミュニケーションの諸問題をとりあげている。今年度は第2年度にあたるが、文字記録、各種の印刷物、手紙といった情報メディア、中・近世の諸国家や帝国の内外をむすぶ情報流通ネットワークの問題、情報と公権力、近代「公共空間」の成立などが、討論の主トピックであった。		6月18日	広域郵便システムの成立化とトゥルン・ウント・タクシス家	渋谷聡（鳥取大）
班員 小山 哲 高田京比子 田中雅一 谷井陽子 富永茂樹 横山俊夫（以上所内）服部良久 夫馬 進 南川高志（以上文学部）川島昭夫（総合人間学部）川北 稔 江川 温（以上大阪大）井上浩一 大黒俊二（以上大阪市大）河村貞枝 渡辺 伸（以上京都府大）阿河雄二郎（大阪外語大）川本正和（奈良産大）京楽真帆子（茨城大）合田真史（甲南大）佐々木博光（大阪府大）森 明子（国立民博）三成美保（摂南大）山辺規子（奈良女子大）脇田晴子（滋賀県立大）田中俊之（京大研修員）		6月25日	宗教改革の伝播と農民戦争 — エルザス地方を中心に	渡辺
1996年		7月2日	帝国プロパガンダとしての移民情報提供活動	川本真弘（大阪大・院）
1月16日	13-14世紀のヴェネツィアにおける海外居住地と本国のコミュニケーション	9月17日	最初の文明社会メディア — いかにして人は粘土板に記録するようになったのか、なにが粘土板に記録されずにのこったか。	前田
1月23日	清代官僚組織内部のコミュニケーション	9月24日	恋文と新聞の間 — 近世ポーランドにおけるニュース・メディア	小山
2月6日	戦国期における文化の伝播について — 三条西実隆と空紙を中心に	10月1日	説教壇に登るまで — 最近の説教研究から	大黒
4月16日	記号としての紅茶 — 13植民地のAnglicizationとde-Anglicization	10月15日	中間集団における声と沈黙 — フランス革命期の民衆協会について	富永
4月23日	コチニールと「緑のカーテン」 — James Andersonの通信網	10月22日	心中考 — あるコミュニケーションのかたち	横山
5月7日	DNBと女性、およびイギリス近代女性史におけるコミュニケーション	11月5日	ビザンツ年代記における情報の加工	井上
5月21日	中世盛期の公会議決議の伝達方法	11月19日	体験教育の功罪 — ワイマール期の改革教育学運動	佐々木
5月28日	異文化コミュニケーションあるいは交易拠点帝国のイデオロギー — 16世紀のモルッカ諸島をめぐる	11月26日	中世史とコミュニケーション	服部
		12月3日	啓蒙期ドイツの読書協会と懸賞論文 — 刑法改革にむけた意見交換・表明・集約の方法	三成
		12月17日	フランス近世期の図書館事情	阿河
			インド文化史の諸問題 — 古代インド王権とその周辺 —	班長 井狩 彌介
			政治権力と宗教権威との関係は、世界の各文明地域においてそれぞれ独自の様相をもって展開し、その文明の基本性格と密接に結びついている。古代インドにおいてこの問題は、権力の中心に立つ王と、正統な宗教儀礼伝承を独占するブラーマン知識階級との関係に典型的に現われる。本研究では、本来は独立した文献群として発生した「法典」と「王権政略論」が次第に相互影響を及ぼしつつ歴史的に交差し	
				合田

て行く過程を焦点に据える新たな視角から、インド学各分野の専門研究者の協力のもとに、権力と権威との関係構造とその歴史的展開の考察をはかる。叙事詩『マハーバーラタ』の「ラージャダルマ(王法)」章(XII. 1-128)に焦点をあて、隔週に行われる研究会ではテキストの会読形式を中心として研究が進められている。本年度は12月までに同章XII. 73までの検討を終わった段階で、王権の諸側面が関連文献の記述との比較のもとに扱われてきた。

班員 荒牧典俊 藤井正人 船山 徹(以上所内) 徳永宗雄 御牧克己 村上昌孝(以上文学部) 赤松明彦(九州大) 永ノ尾信悟 土田龍太郎(以上東京大) 榎本文雄 伏見 誠(以上大阪大) 狩野 恭(神戸女子大) 黒田泰司 八木 徹(以上大阪学院大) 後藤敏文(東北大) 後藤純子(大阪市立大) 島岩(金沢大) 正信公章(追手門学院大) 高島淳(東京外大) 中谷英明(神戸学院大) 林 隆夫(同志社大) 引田弘道(愛知学院大) 増田良介(大阪外大) 松田祐子(東方学院) 矢野道雄(京都産大) 渡瀬信之(東海大) 乙川文英 杉田瑞枝 野田智子 山下勤(以上京大・院) 坂本恭子(大阪大・院)

近代社会における研究者の組織化— 研究所・学会・学派 —

班長 阪上 孝

19世紀も後半に入ると、今日われわれが「研究者」と呼びならわしている人々が大量に出現し、さまざまな「研究所」や専門的な「学会」「学派」へと「組織化」されてゆく。この現象を個々の研究所、学会等の検討をつうじて解読するのが本研究班の基本的な目的である。3年目を迎えた本年も、前年度までと同様、日・米・欧その他の地域を対象に、さまざまな研究所、学会等の具体的な事例が報告され、それぞれのふくむ問題をめぐって議論がなされた。最終年度となる次年度では、これまで積み重ねてきた議論を踏まえたうえで、研究のまとめを進めてゆく予定である。

班員 上野成利 大浦康介 北垣 徹 瀧井一博 田中雅一 富永茂樹(以上所内) 川島昭夫(総合人間学部) 崎山政毅(農学部) 宇城輝人(京大研修員) 前川真行(京大・院) 上山隆大(ウェルカム研究所) 川越 修(同志社大) 小林清一(滋賀県立大)

富山一郎 光永雅明(以上神戸市外大) 中岡哲郎(大阪経済大) 西川長夫 渡辺公三(以上立命館大) 水嶋一憲(関西学院大) 牟田和恵(甲南女子大) 山中浩司(大阪大)

1996年

- | | | |
|--------|---------------------------------|--------------|
| 1月19日 | デュルケム学派と社会主義 | 北垣 |
| 2月23日 | 18世紀の植物プロジェクトと植民地アメリカ | 川島 |
| 4月26日 | 研究会の方向をめぐって—研究者の組織化をどう考えるか | 阪上 |
| 5月17日 | 権威と家族—フランクフルト社会研究所の共同研究をめぐって(2) | 上野 |
| 5月31日 | ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス—その創設をめぐって | 光永 |
| 6月14日 | Arguing over Intentions | P.Livingston |
| 6月28日 | 社会政策学会の成立をめぐって | 前川 |
| 7月19日 | ヴァイマル社会国家と(性=生)科学の制度化 | 川越 |
| 9月20日 | 実験と生命—パストゥール伝説の解体にむけて(1) | 富永 |
| 10月11日 | 伊藤博文と国制知 | 瀧井 |
| 10月25日 | メディアとしての病院—ベルリン・シャリテ病院と精神医学 | 山中 |
| 11月15日 | 〈近代社会における研究者の組織化〉を考えるために | 上野 |
| | フランスにおける教育および研究システムの変化 | 北垣 |
| 11月29日 | 失業と統計—世紀転換期におけるフランスでの試み | 宇城 |
| 12月13日 | 組織化の諸相—研究所・大学・財団 | 小林 |

東 方 部

唐宋美術の研究

班長 曾布川 寛

1995年4月から5ヶ年の計画で始まった本研究は、隋・唐・五代・宋代の美術全般についてより精確な理解を目指す。特に繁栄の極に達した盛唐美術を中心に、初唐からそこに至った過程、またそこから一

転して写実的な山水画や花鳥画に代表される宋代美術を生むに至った背景を探る。具体的な方法としては出土や伝世の文物、石窟寺院の仏教美術、画論・書論の芸術論を三本の柱として、発表と会読を交えて進めていく。本年の芸術論の会読は『益州名画録』（宇佐美文理担当）を取り上げた。

法顯傳研究

班長 栗山 正進

3月をもって予定どおり終了した。5世紀初頭に中央アジアからガンダーラ、中インドを経てスリランカにいき、マヒーシャーサカ部の律典を得、南海より中国に帰った法顯の行歴記は、当時の中央アジア、インドの仏教事情を叙述している。章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社、1985）をテキストにその注を読みつつ、19世紀の仏訳注1例、20世紀初めの英訳注3例、日本語訳注2例の諸訳を照合して、抛るべき現代語訳を作成し、あわせて5世紀の中央アジアとインドを班員の専門部門である歴史、言語、宗教、考古、美術など多角視点をもって検討した。

譯經僧傳研究

班長 栗山 正進

訳經僧とは、インドや中央アジアから中国にやってきて、經典漢訳に参画した仏教僧である。かれらに関する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などに編纂されている。これらの伝記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視点をもって読解検討し、4世紀-8世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて據るべき現代語訳を作成する。研究会は1996年4月から2001年3月まで隔週の月曜日（2時-5時）に文献センター会議室で開催。本年度は改修工事のため7月以降休会とした。

中國語音韻史の研究

班長 高田 時雄

本研究班は、一般の書目には著録することの稀な明清の音韻学関係の資料を取り上げ、序跋や凡例の会読を通じて、その資料的性格を闡明し、明清の音韻史を辿ろうとするものである。最終的には、『小學考』の補編ともいべき明清の音韻学書の提要の作成を目的とする。4年目の今年度は、以下の資料

に関する班員諸氏の報告を得た。

字彙（韻法直圖・韻法横圖）（中前千里）、等音（木津祐子）

また、香港中文大学に留学中の吉川雅之が梅州地区客家語の概況を報告した他、楊劍橋氏（復旦大学中文系）を講師に招き「近代漢語的聲音合口問題」と題して特別講演を行った。

辺境出土木簡の研究

班長 富谷 至

私たちの研究班は居延漢簡や敦煌漢簡などの出土資料を古文書学的手法を通して読み解くことを目的としている。本年度は『敦煌漢簡』（甘肅省文物考古研究所編、1991年、北京、中華書局）をテキストとして取り上げた。木簡現物によって研究することのできない私たちは、次善の策として同書所収の写真図版による会読を行い、同書の釈文とは別途に新しい釈読・注解の作業を進めている。

中國技術史の研究

班長 田中 淡

本研究班は、「中國技術史の研究」班に続き、1991年4月から5年間の研究期間を終了した。すでに班員執筆による研究報告書の編集を終えて、まもなく刊行の予定である。『哲匠録』疊山篇は、会読した漢-唐部分について大幅に増補したテキスト原稿の作成を完了しており、印刷刊行の方途を得たい。王禎『農書』については、すでに会読を完了した分から近々に順次定稿をまとめる作業に着手する予定である。

中國技術の傳統

班長 田中 淡

「中國技術史の研究」に引き続いて、1996年から5年間の計画で、中国技術の伝統と特質について検討を加えてゆく。基本的には生活科学技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で臚げながらみえてきた中国技術史における研究課題は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技術と科学の相関、技術者と社会、生活科学の特質、少数民族の技術、等々の主題に関わるであろうし、個別的には、農業、医学、土木建築、紡績、数学、天文学、化学、その他の領域に広がるであろう。会読のテキストとしては、引き続いて元・王禎の『農書』の農器図譜の訳

注作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を臨時おこなう。

中国の礼制と礼学

班長 小南 一郎

5年計画で始められた本研究班は、第3年次の入った。研究班の中心になる活動は、「周礼」春官篇を賈公彦の疏によって読み、経文と鄭玄注を施す仕事であって、本年度には、巫および史に関わる部分を読んだ。そうした会読と並行し、班員によって、礼制度をめぐる研究報告が行われた。

六朝道教の研究Ⅱ

班長 吉川 忠夫

本研究班は3月をもって終了した。『真誥』全20巻の会読の成果は、『東方学報 京都』第68冊以下に『『真誥』訳注稿』として分載中である。また『真誥』と陶弘景とを主要なテーマとする論文集『六朝道教の研究』の刊行を予定し、そのための研究発表を前年に引き続いて行った。

唐代宗教の研究

班長 吉川 忠夫

神仏教の興隆に象徴的に認められている唐代宗教の動きを、唐の神清撰『北山録』全10巻を会読のテキストに取り上げながら究明する。神清は蜀の僧。蜀は宗教地理学的に見て興味深い地域である。4月24日に第1回の研究会を開き、現在のところ、巻3「合霸王」のなかばまで読み進んだ。

秦漢隋唐の文物資料

班長 浅原 達郎

本研究班では昨年を引き続き、出土文物に関する班員の研究発表が行なわれ、96年3月をもってすべての日程を終えた。

文献と情報

班長 勝村 哲也

研究方法と状況は昨年と変りがない。ただ本年は改修工事で書庫の使用ができないため文献班の仕事は調査に比重があった。建仁寺両足院は尾崎、牧野を中心に5週に亘って調査し、金によって三国志演義が覆刊された。対馬宗家の蔵書は中嶋他4名の班員が2週に亘って調査し、朝鮮本を中心に約4000コマを撮影した。

情報班は約6万の漢字フォントを公開利用するた

めの研究開発に重点がある。10月には中国電子工業部の張軸材、科学院の楊秀霞、中央研究院の謝清俊、アップル社のリコー・コリンズの諸氏を招請して、フォント並に属性の公開とパーソナルコンピュータへの実装のための研究について、評価を受けた。報告書を準備している。

梁啓超の研究

— その日本を媒介とした西洋近代認識について —

班長 狭間 直樹

「梁啓超の研究」は、中国の近代世界認識形成、および近代西洋学術文化の摂取に多大な貢献をした梁啓超の西洋近代文明摂取の過程を、その窓口になった日本の媒介作用に着目して研究しようとするものである。本班はほんらい3年の予定であったが、論文執筆の準備のために1年延長し、本年度は論文原稿の提出とその討議にあてられた。ここ3年の研究蓄積の上に、多くの新知見を含む梁啓超論が披露され、研究報告用の論文が揃いつつある。

中国近代の都市と農村

班長 森 時彦

5年計画の4年目をむかえた本研究班は、都市と農村の関係を主軸に中国近代史を長いタイムスパンで縦断的にとらえなおし、前近代から現代にいたる中国社会の変動を巨視的に分析する視座の形成をめざしている。本年度は、中国の伝統社会がもっとも早く西欧近代の衝撃に反応した地区である長江、珠江の両デルタ地域を対象とする研究報告が過半数を占めた。これらの報告は、両地域においてウェスタン・インパクトはいかに中国社会に浸透したか、伝統的な農村の社会関係は近代化の中でいかに変化したか、その変化が農村の都市化をいかに促進したか、さらに農村手工業はいかに近代的工業システムに包摂されていったか等等の問題をめぐって、従来の知見を書き換えるとともに、本研究班の収斂していくべき方向を指し示すものでもある。なお12月6日には、中国社会科学近代史研究所の虞和平氏に「清末以後城市同郷組織形態的現代化 — 以寧波旅滬同郷組織為中心」というテーマで講演していただいた。

北朝後半期佛教思想史研究 班長 荒牧 典俊

北朝後半期仏教思想史が、道路の成実学、玄高の華嚴三昧、曇無讖の菩薩戒を融合させた「菩薩戒運動」として展開しはじめることを確認した後、つづいて、それが、南朝伝来の『勝鬘經』『涅槃經』『楞伽經』など、及び菩提流支訳『十地經論』などを受容して、いわゆる地論宗教学へと発達し、さらには天台宗・華嚴宗教学へ発達することを文献上に実証するために、北朝敦煌宮本、スタイン文書613及び4203のテキストを確定し、訓読する作業を行っている。それが終了した後に、それらのテキストに注解を加える予定である。

客 員 部 門

東アジアの日常における両界媒介事象の比較研究

班長 三浦 國雄

本研究班は、班員各自の固有のテーマを〈媒介〉の観点から再編成するという、一種のスクラップ・アンド・ビルド方式でやってきたが、最終年に入った本年度は、自己の穴倉からもう一步、共通テーマの野原の方へ踏み出るように心掛けてもらった。その結果、逆に〈媒介〉という視点から新たにテーマを見出した班員も現れたし、共通テーマに対する認識もたがいに深まったように思われる。この勢いを論集に収斂したいが、論集刊行後も〈媒介〉のテーマは、各班員の胸中で鳴り続けるだろうという予感がする。本年度も釜鳴神事等、野外研究会（野遊）を時折挿んで研究班の活性化を企てた。なお、研究報告と並行して煤めらてきた『簠簠内伝』の輪読は全巻完読にまでは至らなかったが、折角の蓄積を本研究班の成果の一つとして残せないものかと、目下思案中である。輪読の過程で、『冠註大全』という特異な註解書が新たな研究対象として浮上してきたことを付け加えておきたい。

班員 井波陵一 木島史雄 金 文京 齋藤希史
ブリギッテ・シテータ 瀧井一博 ロナルド・トビ 藤井正人 藤田隆則 横山俊夫（以上所内）北
畠直文（食糧科学研）藤井譲治（文学部）梅谷繁樹
（園田学園女子大）ミヒャエル・キンスキー（同志
社大）後藤静夫（国立文楽劇場）塚本 明（三重大）

都築晶子（龍谷大）西山 克（京都教育大）羽賀祥
二（名古屋大）原田禹雄（もと邑久光明園）深澤一
幸（大阪大）藤井弘章（京大・院）

1996年

- | | | |
|-------|--|----------------|
| 1月20日 | 貞室『かたこと』考
日清戦争記念碑論 | 横山
羽賀 |
| 2月3日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「十死一生日」～「道虚日之事」 | 横山 |
| | 日本型華夷論の再検討
—儒教世界の中の中・近世移行期 | トビ |
| 2月21日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「一切不成就日事」～「八専之間日
之事」 | 深澤 |
| | 古代人と眠り | シテータ |
| 4月20日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「太歳神前後對位事」
異性装と御釜 | 藤井（譲）
西山 |
| 5月11日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「十二月凶會日事」
大姐見喜 | 三浦
井波 |
| 5月25日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「大將軍遊行事」～「土公出入依居
座大土小土事」
龍燈と聖地 | 都築
藤井（弘） |
| 6月22日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「土公変化之事」～「追加」
詩人と女仙 | 原田
深澤 |
| 6月29日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「二季彼岸事」～「四季土用事」
一遍上人について | 齊藤
梅谷 |
| 7月13日 | 神道大系本『簠簠内伝』
「土用間日事」～「三伏日事」
心のよりどころ
—中国古代の衣の呪術 | 金
木島 |
| 9月28日 | 回顧と展望
神道大系本『簠簠内伝』
「五寶日沙汰事」
琉球を守護する神 | 三浦
梅谷
原田 |

彙 報

10月19日	神道大系本『篋篋内伝』 「同五掟時事」 東アジア諸王権の媒介現象	西山 金		II 個人研究 日 本 部	
10月26日	神道大系本『篋篋内伝』 「三寶上吉日事」丙寅～丙寅 黄婆論	木島 三浦	日本近代文化の研究 19世紀における明治維新 「日本植民地帝国」の経済史的研究	飛鳥井雅道 佐々木 克 山本 有造	
11月16日	神道大系本『篋篋内伝』 「三寶上吉日事」～甲午～己酉 大ざつしよ再論	深澤 横山	前近代日本の文明史的研究 近代東アジアにおける日本の法と政治 近代朝鮮の政治と社会 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク	横山 俊夫 山室 信一 水野 直樹	
11月30日	通書玉匣記初探 国家学会の盛衰	三浦 瀧井		籠谷 直人 落合 弘樹	
12月7日	餅の媒介機能 19世紀日本社会と記念碑文化	北畠 羽賀	文学と近代 貨幣の研究 ドイツ国家学と近代日本 近代日本の言語政策	齋藤 希史 安富 歩 瀧井 一博 安田 敏朗	

西 洋 部

社会的相互行為の解読	谷 泰
知識と社会制度	阪上 孝
シュメール行政・経済文書の研究	前川 和也
古代インド・ヴェーダ祭式の構造と歴史的展開の研究	井狩 彌介
フランスの詩学	宇佐美 齊
フランス革命と近代的主体の成立	富永 茂樹
南アジアの宗教と社会	田中 雅一
文学理論の研究	大浦 康介
後期ヴェーダ文献の成立史研究 —ブラーフマナからウパニシャッドへ—	藤井 正人
初期近代ポーランドの政治文化	小山 哲
音楽の記号論	藤田 隆則
フランクフルト学派の政治思想	上野 成利
中世ヴェネツィアにおける「家」	高田京比子
共和国の法と道徳—フランス第三共和政期における共和思想と新カント派—	北垣 徹
ポール・ヴァレリーと20世紀フランスの思想	森本 淳生

東 方 部

宋代官僚制度研究	梅原 郁
六朝隋唐精神史	吉川 忠夫
中国近代社会思想研究	狭間 直樹
南アジア亜大陸北西地方の歴史考古学研究	
	栗山 正進
中国古代の伝承文化研究	小南 一郎
原始仏教起源論	荒牧 典俊
中国美術の様式と意味	曾布川 寛
中国建築の様式・技術・空間	田中 淡
近代中国の綿紡織業	森 時彦
新漢字コード系の構築	勝村 哲也
道教思想研究	麥谷 邦夫
敦煌写本の言語史的研究	高田 時雄
中国古代中世の法制	富谷 至
先秦時代の金文	浅原 達郎
中国の小説、演劇及び講唱文学の演変	金 文京
清代の文化と社会	井波 陵一
古代中国の考古学研究	岡村 秀典
中国科学の基礎理論	武田 時昌
明清時代辺境社会史	岩井 茂樹
古代中国における天文学と文化	新井 晋司
インド・中国における唯識仏教の基盤と背景	船山 徹
中国共産主義運動の歴史と思想	石川 禎浩
宋元道教研究	横手 裕
明清時代の官僚制度	谷井 陽子
中国中世学術史の研究	木島 史雄
中国小学史	森賀 一恵
中国仏教美術の研究	稲本 泰生
前近代朝鮮の政治と社会	矢木 毅

事 業 概 況

夏期公開講座

1996年 7月	於 本館大会議室
	—歴史研究の新しい地平—
5日	アジアの海と日本—地域の連鎖のなかで動く人々を見つめて 籠谷 直人
	中国の古代を掘る—日中共同発掘の現場から
6日	士族は没落したか? 落合 弘樹
	歴史における事実と真実—孫文の三民主義と
	毛沢東の解釈を例として 狭間 直樹

開所67周年記念公開講演会

1996年11月 7日	於 京大会館101号室
	ローレンツ・フォン・シュタインと明治日本
	瀧井 一博
	王国維の学問について 井波 陵一
	ヴェードゥーラ学派の新写本について—失われた
	古代インド祭式文献の再発見 見井狩彌介

研究成果の刊行

I 紀 要

人文学報 第77号

生物学至上主義への道—ひとつの歴史観のたそがれ—	佐々木博光
「日本におけるシュタイン問題」へのアプローチ	瀧井 一博
文化の消費—日本民芸運動の展示をめぐる—	金谷 美和
日中戦争前の日本の経済外交—第二次「日印会商」(1936~37年)を事例に—	籠谷 直人
自然言語における量化と否定の相互作用—「シカ…ナイ」構文を例として—	松井 (山森) 良枝

人文学報 第78号

16世紀ポーランドのふたつの戦争論	小山 哲
岩倉使節団編成過程への新たな視点—研究史への批判と試論—	鈴木 栄樹

彙

報

「満洲国」の農業関係金融 安富 歩
 プロト工業期金融の一試論—天保期における銀行の
 経営形態の胎動— ロナルド・トビ
 《人間》から構造改革へ—アンリ・ド・マンの心理
 学をめぐって— 宇城 輝人
 彙報（1995年1月—1995年12月）

東方學報 第68冊

漢代穀倉制度—エチナ川流域の食料支給より—
 富谷 至
 白玉蟾と南宋江南道教 横手 裕
 康熙辛卯江南科場案について 井波 陵一
 施存統と中國共産黨 石川 禎浩
 陸徳明學術年譜 木島 史雄
 李義山七律集釋稿（九） 李義山七律注釋班
 元史刑法志譯注稿（二）

「中國近世の法制と社會」研究班
 眞詰譯注稿（一） 「六朝道教の研究」研究班
 小野和子教授著作目録
 彙報（1995年1月—1995年12月）

ZINBUN（歐文紀要）No.30

Yasuke IKARI, Vādhula Śrautasūtra 1.1–1.4
 [Agnyādheya, Punarādheya]
 —A New Critical Edition of the Vadhula
 Śrautasūtra, I — 1
 Paul DUMOUCHEL, Pinel's *Nosographie* & the
 Status of Psychiatry 129
 Naoto KAGOTANI, The Role of Chinese
 Merchants in the Development of the
 Japanese Cotton Industry, 1890-1934 ... 149
 INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES,
 STAFF AND SEMINARS 193

II 研究報告その他

明末清初の社会と文化 小野和子編
 1996年3月31日刊
 注釈漂流紀事 飛鳥井雅道・齋藤希史編
 1996年4月25日刊
 元史百官志索引 徳永洋介編
 1996年3月29日刊
 所報「人文」第42号
 1996年3月31日刊

所 員 動 静

- ・高田京比子氏を助手（西洋部）に採用（1月1日付）。
- ・鈴木啓司助手（西洋部）は、辞任（3月31日付）の上、名古屋学院大学講師に就任。
- ・稲葉 稜（東方面）助手は、辞任（3月31日付）の上、龍谷大学助教授に就任。
- ・三浦國雄大阪市立大学教授は、併任教授（比較文化研究部門、4月1日～1997年3月31日）。
- ・串田秀也大阪教育大学助教授は、併任助教授（比較文化研究部門、4月1日～1997年3月31日）。
- ・岩井茂樹京都産業大学助教授を、当研究所助教授（東方面）に採用（4月1日付）。
- ・北垣徹氏を助手（西洋部）に採用（5月1日付）。
- ・安田敏朗氏を助手（日本部）に採用（6月1日付）。
- ・森本淳生氏を助手（西洋部）に採用（9月1日付）。
- ・田中雅一助教授（西洋部）は、委任経理金により、12月28日大阪発、コロポ漁業省に於いてスリランカにおける漁業に関する情報収集、シニ基金研究所に於いて「欧亜フォーラム」出席及び研究交流、ロンドン大学に於いてスリランカの水産資料収集を行い、1月24日帰国。
- ・藤井正人助教授（西洋部）は、1月8日大阪発、パニヤール村周辺に於いてサーマヴェーダ伝承の現地調査を行い、1月30日帰国。
- ・高田時雄助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、2月18日大阪発、イタリア大使館及びロス家に於いてロス文庫の調査研究を行い、2月24日帰国。
- ・山本有造教授（日本部）は、一橋大学経済研究所COE 経費により、2月24日大阪発、ソウル大学経済学部に於いて「日韓比較長期経済統計研究会」に出席、2月28日帰国。
- ・金 文京助教授（東方面）は、3月7日大阪発、香港中文大学に於いて「粵劇粵曲語文検討会」に出席・研究発表を行い、3月11日帰国。
- ・瀧井一博助手（日本部）は、委任経理金により、2月20日大阪発、デュッセルドルフ大学、エッセン大学、ウィーン大学、プラハ大学、ベルリン自由大学に於いて明治期日本人のヨーロッパでの国家理論修得過程の研究のための資料調査及び研究交流、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州立図書館、キール大学に於いて資料調査を行い、3月19日帰国。
- ・田中雅一助教授（西洋部）は、3月29日大阪発、シンガポール大学に於いて「アジアの諸宗教についての日本人による研究をめぐって」ワークショップ参加・研究発表を行い、4月1日帰国。
- ・石川禎浩助手（東方面）は、3月31日大阪発、社会科学院近代史研究所、社会学研究所に於いて中国近現代史に関する研究資料の収集を行い、4月6日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方面）は、3月8日福岡発、荊沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の発掘調査を行い、4月10日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方面）は、4月19日大阪発、荊沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の発掘調査を行い、4月30日帰国。
- ・富永茂樹助教授（西洋部）は、5月1日大阪発、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校に於いて国際研究集会「公共空間とデモクラシー」に参加及びフランス革命史に関する資料収集、ケベック大学モントリオール校に於いてセミナー「合理主義と政治哲学」に出席、5月22日帰国。
- ・藤田隆則助手（西洋部）は、7月10日大阪発、サンパ・リカアンアジア典礼・音楽研究所に於いて東アジアの歌唱法の比較研究を行い、8月10日帰国。
- ・宇佐美 齊教授（西洋部）は、7月11日大阪発、ジャック・ドゥーセ文学図書館及びフランス国立図書館に於いてフランス近代詩に関わる草稿研究、トゥールーズ・ル・ミリュウ大学に於いて「日本におけるフランス近代詩の受容」に関する研究集会出席、8月12日帰国。
- ・麥谷邦夫助教授（東方面）は、国際研究集会研究員派遣旅費により、8月11日大阪発、五洲大酒店に於いて「道家文化国際学術シンポジウム」に出席、8月17日帰国。
- ・金 文京助教授（東方面）は、8月16日大阪発、韓山書院に於いて「饒宗頤学術検討会」に出席・研究発表、香港大学に於いて香港文学に関する資料収集を行い、8月23日帰国。

彙 報

- ・前川和也教授（西洋部）は、7月5日大阪発、大英博物館に於いてシュメール楔形文字文書の研究を行い、8月24日帰国。
- ・谷 泰教授（西洋部）は、7月24日大阪発、ブカレスト民族学博物館、トランシルヴァニア民族学博物館及びヒストリッツア地方、ベルガモ県北部山村に於いて牧民文化関係資料収集を行い、8月28日帰国。
- ・荒牧典俊教授（東方部）は、9月2日大阪発、ドイツ恵光寺日本文化センターに於いて「因果律に関する仏教シンポジウム」に出席・研究発表、ライデン大学に於いてT.Vetter教授と原始仏教に関する研究討論、ハンブルグ大学に於いてL.Schmithausen教授と仏教起源論に関する研究討論、デュッセルドルフ大学に於いてV.Beck教授と中国における仏教受容に関する研究討論を行い、9月12日帰国。
- ・梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月29日大阪発、民族学博物館及び東アジア博物館に於いてスヴェン・ヘディン将来品の調査研究及び資料収集、フランス国立文書館に於いてペリオ収集敦煌写本の閲覧及び資料収集を行い、9月18日帰国。
- ・安富歩助手（日本部）は、文部省在外研究員旅費により、3月29日大阪発、ロンドン大学経済学部に於いて大自由度力学系としての経済の研究を行い、9月27日帰国。
- ・高田時雄助教授（東方部）は、9月24日大阪発、甘肅工業大学接待中心に於いて「中国敦煌吐魯番学学術討論会」出席、上海図書館に於いて敦煌関係資料収集を行い、10月3日帰国。
- ・高田京比子助手（西洋部）は、10月3日大阪発、パドヴァ大学、ヴェネツィア国立古文書館に於いてイタリア中世史に関する調査を行い、10月15日帰国。
- ・森本淳生助手（西洋部）は、10月15日大阪発、パリ第12大学、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーに関する調査・資料収集を行い、11月1日帰国。
- ・森賀一恵助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月27日大阪発、ローマ国立図書館、フィレンツェ国立図書館、ボローニャ大学、ヴェネツィア国立図書館に於いて漢籍調査及び宣教師の手になる中国語史資料の研究を行い、11月9日帰国。
- ・高田時雄助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月27日大阪発、ローマ国立図書館、フィレンツェ国立図書館、ボローニャ大学、ヴェネツィア国立図書館に於いて漢籍調査及び宣教師の手になる中国語史資料の研究を行い、11月15日帰国。
- ・田中 淡教授（東方部）は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金により、10月31日大阪発、大明宮含元殿発掘現場に於いて「大明宮含元殿遺跡修復事業専門家会議」に出席、社会科学院考古研究所に於いて資料調査を行い、11月3日帰国。
- ・藤田隆則助手（西洋部）は、8月25日大阪発、イリノイ大学音楽学部、コーネル大学に於いて東アジア伝統音楽の伝承様式についての研究、ハーワードジョンソンに於いて「民族音楽学会」に出席、11月18日帰国。
- ・稲本泰生助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月15日大阪発、インド美術館に於いて博物館遺物調査、プリンス・オブ・ウェールズ博物館、エレファンタ、カネリーに於いて博物館遺物調査及び仏教遺跡調査、アウランガバード、エローラ、アジャンター、バージャー、ベドゥサーに於いて仏教遺跡調査を行い、11月29日帰国。
- ・船山 徹助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月15日大阪発、インド美術館に於いて博物館遺物調査、プリンス・オブ・ウェールズ博物館、エレファンタ、カネリーに於いて博物館遺物調査及び仏教遺跡調査、アウランガバード、エローラ、アジャンター、バージャー、ベドゥサーに於いて仏教遺跡調査を行い、11月29日帰国。
- ・栗山正進教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月21日大阪発、タキシラ遺跡に於いて仏寺構成要素の現地調査を行い、12月6日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月30日大阪発、大英博物館に於いてガンダーラ遺物の調査を行い、12月11日帰国。

- 勝村哲也助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、12月26日大阪発、香港中文大学、マカオに於いてヨーロッパ人の中国探検に関する資料収集を行い、12月29日帰国。
- 曾布川 寛教授（東方部）は、委任経理金により、12月27日大阪発、中央研究院歴史語言研究所、故宮博物院に於いて中国美術資料の収集を行い、12月30日帰国。